

『オシムの言葉』 イビツァ・オシム

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート15回目は、定本『ゼミナール経営学入門』第14章の「リーダーシップ」。今回は急遽予定を変更し、先日亡くなったサッカー界の偉人、イビツァ・オシム氏を偲びつつ、その「リーダーシップ」論を取り上げます。ご登場いただく予定だった学者の先生方、申し訳ありません。

その1: 名言の背景

イビツァ・オシム氏は1941年、旧ユーゴスラヴィア(現ボスニア・ヘルツェゴヴィナ)のサラエボに生まれ、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字、1つの国家という、私たち日本人には想像を絶する環境で育ちました。

そしてストリートで修得した技術は、頭抜けた身体に数学脳を頂き、若くしてサッカーで大きく花開きましたが、もし違う時代に生まれていれば、数学者か物理学者、あるいは哲学者か教育者として世界に名を残したかも知れません。また一流選手が一流監督になった事例は、スポーツ界において例外ですが、その両方に「超」が付くのは、そのまた例外。しかも強豪でないチームを率いて目覚ましい実績を残した例は、他に見当たりません。

いま改めてその言動の数々を振り返るとき、それらを遺すことに関わった記者や通訳、そして記事や著作の編集の方々へ深く感謝するばかりです。

その2: 名言の真意

さて今回、特定の名言ではなく、『オシムの言葉』(集英社文庫)一冊を挙げたのは、それを「リーダーシップ」全体に適用するため。氏が「総仕上げ」として目指した「未来の」「日本人にしかできない」サッカーという方向性は、「いま」の我が国が目指す「社会」や「経済」にも当てはまるからです。

因みにもし氏が経済界に身を投じていれば、次々と事業を起こす、渋沢栄一のような事業家になっていたでしょう。しかも一代限りではなく、その遺伝子を引き継いだ経営者を続々と育成し、時と場所に合った「人間重視」の経営で、母国のみならず世界に貢献していたと思います。

観客が喜ぶ魅力的なサッカーをビジョンに掲げ、与えられた条件の中で選手共々自分も成長しながら、それを実現しようとするその意志やプロセス、システムは、あらゆる事業のお手本でもあります。

『三々な経営』

- 0-11~13 一流経営人の条件①~③
- 0-21 「プロフェッショナル」とは
- 2-13 「リーダー」の役割
- 2-14 「変革リーダー」の条件
- E-29 経営人の必須体験
- Z-13 「文化」のカ・その2(スポーツ)

その3: 定本の確認と発展

この章は、定本の中で最も加筆修正が必要な部分。すでに何度かコラムに書きましたが、ビジョン実現を目指す「変革リーダーシップ」は、前世紀末に維持改善中心の「マネジメント」から分離独立したからです。そのため「マネジャー」の一般教養であるこの章は、「変革」を目指す「リーダー」にとって、その基礎としての必要条件に過ぎません。

また実際、激しい環境変化に直面する現場では、その状況を上司に逐一報告連絡相談し、指示を待って行動することが許されません。緊急度の高い事案については、すべてのメンバーに「リーダーシップ」が必要とされているのです。

その視点で『オシムの言葉』全体を見直すとき、絶えず状況が変化するサッカーに求められているのが、メンバー個々の「リーダーシップ」であることは明確です。その中で監督とは、目指すビジョンを示し、相手との関係の中で果たすべき役割を選手個々が考え、行動できるように支援する「リーダー」に他なりません。そしてその環境全体を整えるために必要なのが、GM(ゼネラル・マネジャー)の「マネジメント」なのです。

以上を表す名言は、当初予定していた経営学者、故ウォレン・ベニスの「マネジャーはものごとを正しく行い、リーダーは正しいことをする」。

『オシムの言葉』は、その事例・金言集です。

2022年5月16日 実空